

いそつぶ物語

十六

其四十 贅者

『夫なら別にそう騒ぐにも及ばんじやないか、そ
うして、夫をれ金じやと思つて居ればいゝじやな
い所に置きたいと思つて、裏の壁に穴をあけて
其中に入れて置いて、毎日～のぞいて見ては樂
にして居りました。

所が、一人の悪漢が、毎日壁の穴をのぞいて居る
のを見つけて、一体何してゐるだらうと思つて、
其贅者の知らぬ間に、其穴の中を探して見て、
とう～澤山なれ金を見出して、すつかり夫を盜
んで行きました。

次の日に贅者が来て、のぞいて見ると、金が一文
もないで、さあ大變だといつて、太騒ぎをして
探しにかかりました。すると、隣りの人があつて、
僕等は一度もそんなに八釜しく騒いだ事はない
よ」といふと、仔豕は答へて『だつて、君方の捕
へ様と僕のとは、譯が違ふのだもの、君等の捕る

其譯を聞いて見て夫から言ひまするは
『夫なら別にそう騒ぐにも及ばんじやないか、そ
うして、夫をれ金じやと思つて居ればいゝじやな
いか、金が此處にあつた時だつて、使はなかつた
のだから、石を入れといても同じじやないか』

其四十一 仔豕と羊と山羊

一匹の仔豕が、羊だの山羊だと、一所に小屋に
入れられました。所が或時に、番人がやつて來て
其仔豕を捕へますと、さあ、仔豕が泣く、騒ぐ、
暴れる、いかにも騒々しいので、羊と山羊とが側
から「君、僕等も、時々彼の人に捕まるよ、然し
僕等は一度もそんなに八釜しく騒いだ事はない
よ」といふと、仔豕は答へて『だつて、君方の捕
へ様と僕のとは、譯が違ふのだもの、君等の捕る

のは、たゞ、毛だの乳だの、爲だらう、所が僕を捕へるのは、命を取る爲だもの！

其四十二 自慢する人

或人が、方々の國々を歩いて、自分の國へ返つて来てから、大法螺を吹いて自慢をしました。其慢話の中に、こういふことをいひました。『私は印度に行つて滞在つて居つた時、飛行術をやつて、印度人を吃驚させた。機械もなしに飛んだのだから、えらいだらう。嘘と思ふなら、見た人がいくらもわかるのだから、證據人として、呼んで來てもいい』すると、側で聞いて居た一人が言ふには『君、其話が眞實なら、何も態々證據人を呼ぶには及ばん此處を印度だと思つて、一番飛んで見せてくれ、ばい、じやないか』

子供が金米糖の這入つた瓶の中へ手をつき込んで出来る丈け澤山握んで、さて手を出さうとした所が、瓶の首の所でつかへて、どうしても出すことが出来ぬ。金米糖さへ、離せば出せるに決つて居るけれども、夫はいやだし、夫かといつて、手を抜くことも出来ず、困つて／＼とう／＼泣き出しました。

おツ母さんは、泣き聲をきつけて、何事だかと思つて來て見ますと、こうでせう。そこで静かに言て聞かせました。

『坊や、お前、手に持つて居る半分丈けでよいとしなさい、すると、手を引き出す事が出來ようか

其四十三 子供と金米糖

一度に余り多くを企てるな